

一九七七年二月一日第三種郵便物認可

発行所 社会通信社

発行人 滝野 忠

e-mail: shakaisushin@nifty.com

東京都渋谷区本町六丁目二八の二コーポ幢ヶ谷九〇四 電話(03)3377-4649 FAX(03)3299-5367

振替 〇〇一〇〇一九一五八四三二 労金 中央労金本店 No.1154163

購読料 月額700円 6カ月前納制

## 〈もくじ〉

### ■巻頭言■

フクシマの人たちは今

原発事故から二年

杉森 ひろゆき……2

脱原発の根源的な捉え方

―相沢一正氏の認識共有を―

花井 吉宅……3

麻生財務大臣の虚言……4

参院選、春闘、電機連合……5

―労働組合大会はじまる(二)―

大野平和運動センターで大活躍

―元大分闘争団・赤峰さん家への旅(上)―

滝野 忠……8

マルクス、エンゲルスの「告白」

―エンゲルス没一〇八年から―

伊勢 太郎……9

「集団的自衛権」の解禁は、戦争への道

―「集団的自衛権とは何か」(豊下楯彦著、岩波新書)を読む―

森 勉……11

読者からのおたより……14

# 旬刊 社会通信

NO. 1151

二〇一三年九月一日号

二〇一三年九月一日発行  
(毎月一日・一五日二回発行)

## フクシマの人たちは今

— 原発事故から二年 —

茨城県東海村には日本原子力発電の二つの原発がある。第一原発は廃炉作業中、第二原発は停止中。全国五二基の原発中、廃炉に追い込める可能性がもつとも高い原発だ。この東海村が揺れている。反・脱原発のリーダー村上村長は、九月村長選に当然立候補とだれもが期待していた。しかし、村長最愛の妻が七月死去。村民は「村上さんたって」と想いを寄せ、署名活動などもおこなった。

村長最愛の妻の死は重い。村上さんは「任期満了に伴う九月の村長選に立候補せず、今期限りで引退する」と正式に表明。「四期が限界。七〇歳になったら辞めようと思っていた。後継も見つかった」と。後継という県出向の副村長は「中立な位置で村民の意見を聞き判断」と記者会見。東海村はこれから村長選に入る。

こんな中、七月二七日行われたのが「フクシマの人たちの今、3・11から二年」と題した講演会&ディスプレイ、写真展。今、避難を余儀なくされている方々から生の言葉で暮らしの実際を聞き、フクシマの人たちの苦しみを我がこととして受け止め、同時に東海第二原発の地元である東海村や周辺の人たちの明日を考えよう、と。

飯館村の長谷川健一さんは福島県飯館村から伊達市に避難。こう講演した。

自分は飯館村出身で、三〇数年前に会社を辞めて乳牛を飼い始めた。村の若手酪農家グループの影響を受け、共同で餌を作りイメーリアップに取り組んだ。その中心が今の村長の菅野典雄さん。自分は菅野さんの片腕となり、村長選では出納責任者を務め、地元の区長になった。

しかし、二年前の三・一一後、状況は一変した。村長は早期帰村に走り、山の除染も手つかずのまま、高レベルの放射能汚染地域に若者も含めた村民の帰還を強いている。私は、「若者はもう村には戻れない。村外で故郷を再建することを考えねばならない。住民の声を真摯に聞け。」と言ったが、村長は聞く耳を持たず、村民の願いを無視している。

政府は二〇一一年一月に航空機モニタリングで測定した空間放射線量をもとに、年間被ばく線量を推計し、避難区域の再編を進めている。年間二〇 mSv 以下を「避難指示解除区域」、一〇～五〇 mSv を「居住制限区域」、五〇 mSv を「帰還困難区域」とした。しかし、地上で実際に測った数値は航空機の数値よりはるかに大きい。村の二〇地区は上記の三区域に分断された。区域によって賠償に大きな格差が設けられ、村民も分断された。もう帰れないと考える人も増えてきたが、今の賠償ではとつてもやっていけない。

浪江町の橘柳子さんは、「現在の本宮市の仮設住宅は一〇回目の避難先となる」。私は「二度国に捨てられた」と語りました。

「自分は中国東北部で生まれ、日本は敗戦となったが、国からは具体的な指令は来なかった。原発事故が起きた後も一緒、国に捨てられ、棄民になった。何かあると、

いつも苦しめられるのは民衆。終戦後と原発事故後の避難は、徒歩が車に変わっただけ。」

浪江町では、原発建設計画が浮上すると反対運動に加わり、浪江町には原発は立てさせなかった。一二年六月に東電や国の刑事責任を追及して、集団告訴に参加した。安全神話を振りまいてきた国の責任は重い。怒るべきだ。

大熊町の大賀あや子さんも、「会津若松市で六カ所目となる借り上げ住宅の避難生活強いられている」と。「自分はローンで家を新築中に被災しました。地震と津波では幸い、家は大丈夫だった。しかし原発事故で、まだ住んでもいないこの新居を手放さざるを得なかった。ソーラーパネルも付け、窓も風通しを良くしたのに。」

「政府は帰還をさかんに宣伝するが、放射線のレベルが高く、その影響がどれだけ、どのように出るのかはつきりわからない以上、子どもたちの命と健康を守るために、避難を選択した人々にも福島にいる人々にも、国の責任で補償することは当然だ。」

(茨城県牛久市議 杉森 ひろゆき)

## 脱原発の根源的な捉え方

― 相沢一正氏の認識共有を ―

このたびの参院選で、唯一爽快感を覚えたのは、無所属の山本太郎氏の当選だった。知名度抜群で激戦選挙区を制したことよりも、脱原発を鮮明に訴え、それを都民がきっちり受け止め、当選させたことだ。脱原発が争点にならなかったこの選挙で、このことは、いくら称賛してもし過ぎることがない。

一四九号の相沢一正氏の巻頭言は、脱原発・廃炉の必然性・不可避性の核心を衝いていて深い感銘を与えるが、浅学非才な僕も、ようやくそれが解かる境位に達した。原発事故は、まさに文字通り、人類史上・未曾有の事故で、原爆投下に匹敵し、フクシマの人民は、ヒロシマ・ナガサキ、チェルノブイリ・ベラルーシなどの人民同様、地獄の黙示録の只中にあるといっても過言ではない。

飛行機や高速列車も無惨な大量死をもたらすことがあるが、相対安全性という確率論に則って運行させつづけている。だが、原発事故は、その人為的事故という点では同じでも、全く異質なもので、末代にまで及ぶ破滅的な点なのだ。もし、あと二つほどの炉でフクシマ級の事故が起こったことを想定すれば、そのことがよくわかろうというものだ。

天然・自然の巨大な破滅的事故というものもありうる（地殻変動や大噴火、彗星衝突、太陽活動の超異常など）が、人類滅亡に関わるが、これは文字通り不可抗力というほかない。原発事故は、これとは全く異質で、資本主義の強欲や、安全神話という盲信がもたらす人為の帰結に他ならない。原爆投下や戦争と同じく、避けられうるもの、不可抗力ではないものなのだ。それゆえに、まさに廃炉を選択するほかないものだ。日本の人民が、相沢氏の認識水準を共有することを希ってやまない。

(花井 吉宅)

## 麻生財務大臣の虚言

麻生（財務大臣、副首相）一族は、九州（福岡）を中心とする地方財閥の元締めといわれる。麻生一族の経済力はいかほどかと、会社四季報（東洋経済刊）をくつてみた。東京・大阪等五つの証券取引所に上場される会社は四四一五社、会社四季報は三五〇社をのせる。

麻生一族の会社はいかなるものか。一社あった。麻生フオームクリート（麻生グループ。計量盛土など気泡コンクリートの最大手。地盤改良の新工法開発に強みとされる）で、資本金二億九〇〇万円、売り上げ高三九億円、労働者数八〇名、株主は麻生、麻生商事、麻生地所中心に二九六名、麻生一族が七〇％超をもつ。多くはこんな中小企業の集合体が麻生グループなのだろう。導き出される結論は、麻生は地方ボスの親分らしい乱暴、粗雑、知性のひとかけらもない話を、読売（六月二九日付）は、「これこそ経済成長への特效薬」であるかのように、こう報じた。

「雇用の確保を優先したことが賃金が上がらなかった一番の大きな背景。賃金は上がれば消費につながる。個人消費は今までマイナスだったが確実に増えている。一五七〇兆の個人金融資産が確実に動くためになにするか。少額投資の配当などを非課税にする。おじいさん、おばあさんが一五〇〇万円までは教育資金として非課税で孫に贈る。

賃金は一回上がると下げられない。たまった金がすぐ消費に回るのは、交際費を税務上の損金―実質減税―とした方が早い。給料は一〇万円上げられないが、交際費を二〇万円渡せば、間違いないとまとっていた（内部留保金の）二百何十兆円が動く。」

宮原耕二氏（日本郵船社長、経団連副会長、経団連経営労働政策委員会委員長）は、ある勉強会で「企業内の過剰人口は四〇〇万人」と壮語する。企業は四〇〇万人も必要なのに雇っている、雇用を大事にしているから、といたいのだ。こんな数字はいつでも、どこでも、だれでもつくれる。「最低必要員」、机上の計算である。

「雇用を優先した」だって。これもでたらめだ。生首はむろん「希望」という名の首切り、広域配転・異動で労働者がどれほど首切られてきたことか。

少額投資者の配当金などせいぜい一ケタの万単位でしかない。それを非課税にしても千円の単位だから、消費拡大は夢のまた夢だ。麻生のような中小企業の親方からすれば、数十万円から数百万円の「節税」は、高級会員店を潤すことは間違いない。しかし、間違ってもらって困るのは数十万、数百万の配当を享受できる労働者はいない。パソコン相手に株式取引するデイトレーダーの元手はせいぜい百万円。

「交際費を損金にせよ」、財務相のいうことか。こんな乱暴な意見に記者から抗議の発言はなかったようである。くり返すが「口曲がり」は、「一時金・ボーナスを『交際費』として出費せよ、交際費が無税なら資本家は節税に、それだけでもうけをふやし、高級飲食店、しゃし品の出費がふえ。内需拡大になる」というのだ。

麻生一族はしよせん中小企業の親分。九州財界は財務相の実弟で麻生コンクリートの社長を九州経済連合会の会長にすえた。九州財界は麻生君を「財務大臣の権能は大きい。九州の損にならないからしばらくおこう」程度のことだ。

# 参院選、春闘、電機連合

―労働組合大会はじまる(二)―

## 春闘の結果

**司会** 組合大会は民主惨敗、党内矛盾噴出といった重苦しい雰囲気はなかつた。選挙結果が示したことは、職場組合員は「政治は大事、それは良くわかつてい。しかし、おれたちの労働条件、たとえば深刻な要員不足、現場には一つの『ミス』も許さない強圧・強権的労務管理、基準内賃金を引き下げ『仕事・役割・貢献度』を基準とする人事・処遇制度をなんとかしてくれ」が圧倒的だ。

参院選での「名簿集める」の号令の背後で賃下げ、人減らし、退職、自殺、うつ病が蔓延しているのに、ダラ幹たちは耳を貸そうとしない。ダラ幹たちも『組合役員と組合員に政治運動に対する意識の乖離』があることが明確になった、「これが組合員の回答でしょう」と所在なげだ。

組合大会の課題は前号(一一五〇号、八月一五日付)の七〇八頁にふれている。労働者・労働組合員最大の関心は賃金、そして労働諸条件だ。だから、春闘が労働運動の中心となった。一三春闘は安倍の金融政策、「二%物価上昇でデフレ克服」論から、安倍本人や大臣どもが経団連に「賃上げ」要請?が大きく報じられた。その「成果」はどうだったのか。

**A** 経団連は政府のお説教に耳を貸さなかった。経団連は「結果は昨年なみ」。大手一一一社総平均は五八三〇円(一・八三%)が最終集計だ。この数字は円安で潤(うる)おった企業の数字。上場会社は三五五〇社もあるんだよ。中小は二五〇万社。

連合は七月三日、最終の回答集計を発表したが、昨年を下回った。平均賃金方式での引き上げ額四八六円(一・七一%)で、昨年比較でマイナス三六円、率でマイナス〇・〇一%。注目の非正規労働者の時間給引き上げの妥結額は一一・五八円で昨年を〇・二七円下回った。安倍や甘利の賃上げ要請は連合への揺さぶりだ。始めからわかっていただけだね。連合は要求しないんだもの。

UIゼンセン同盟(一四〇万人)会長さんがある雑誌でちよつとおもしろい発言してた。こんなど。「マスコミは、ベアを実施と報じていたが、ローソンの回答は家族をもっている人に一時金でプラスするとか、イトーヨーカドーの場合は、手当改定。いずれもベアではない。」

**司会** ゼンセン会長さんの言葉と裏腹に、最終的には「流通が交渉を引っ張る効果」はなかった。

**A** そういうこと。要求しない者に譲歩などするわけないよ。

## ベア―賃金改善―定昇維持

**司会** 春闘はすっかり様変わりした。歴史的に説明してよ。

**A** 春闘発足(一九五五年)時は労働価値説にもとづく理論生計費、いわゆるマーケット・バスケット方式です。「健康で文化的な生活を営むにはどれほどの生活資料があるか」、積みあげて「これだけだ」と額要求となった。賃金は資本から闘いとるの

意識が満ちあふれてたから、私鉄総連は、「定昇制導入はけしからん、そんなものいらん」となった。こんな時代だ。

一九七〇年代前後になるといわゆる経済整合性論ね。今と違ってこの時代はインフレで物価は上がる。だから「物価上昇分＋生産性向上分＋実質生活向上分」。この背景に日経連が六〇年代から唱え始めた「生産性基準原理」があった。理屈は生産性向上の範囲内に賃上げを抑える。

日本労働運動の四番バッターは七〇年代はじめまで総評だった。六〇年代のいわゆる高度経済成長期、J C（金属労協、自動車・電機・鉄鋼・造船）を育成したよね。そして一九八〇年代の労働戦線再編成で連合がつくられた。J C ははじめから「春闘」なんて言葉使わない。正しくは「春季総合労働条件改善」だ。彼らの理屈は生産性向上にもとづく成果配分論。だから、会社に儲けがなければ要求しない。こんな組合の集まりが日本労働運動の中心に座った。

それから二五年。うんと変わったよね。二一世紀に入るとはやりの「失われた十年とか」。GDP、物価は下落、だから経済整合性論は破たん、ようやくと生活向上分を要求に上げるだけ。ベアはいつか死語になり賃金改善、定昇「死守」が今の状況。その定昇は「率」は下げられ、業績改善分はボーナスで。

### 額要求から「水準」へ

運動も変わった。一九七〇年代から「J C 集中決戦」がいわれた。要求しないのだから、回答は雀の涙。J C についていけばおれたちの生活改善はないと、「力」ある労働組合の塊がもさくされたが、産業・業種・業績は違うから、今では五つの連絡共闘会議となっている。五つの大産別に大きくくり、「力合わせ」が目標だ。しかし、「賃金は労働力の再生産費」との考えは忘れられたままだから、大きな、力強い共闘が組めるわけがない。労働組合は有名無実、社会的影響力の薄いものになるからと。パート共闘、非正規共闘、中小共闘がつくられているのが実態だ。

大企業と中小企業の規模・賃金格差、さらには企業間の業績・賃金格差、労働者間格差（正規・非正規等）は要求方式・水準を変えた。額要求は労働者間格差から非現実になった、個別の賃金水準が今様だと最低水準、到達水準、目標水準といったようにね。だから、J C では「おれんところの賃金は目標水準超えてる。なにすればいい」なんてことが大まじめに論戦されている。

悲しいけど、以上が春闘をめぐる今の状況だ。

### 組合員減少

**司会** J R 二労組、電機連合が大会を終えている。現春闘を取り仕切るのにはゼンセン（一四〇万人）、J C の自動車・鉄鋼は企業主義だから。電機ではなにが論議となっているのか。

**B** 今年は中間大会。議論の焦点は、経過報告では①産別統一闘争強化プロジェクト報告、②第四六回衆院選の評価と課題、③二〇一三年総合労働条件改善闘争の評価と課題、議案では①運動方針案の補強、②第三次エネルギー政策。

司会 組織がどんどん減りつづけるとのことだが。

B 運動方針は「九〇年初頭に一〇〇万産別組織をめざし、組織拡大に取り組んできましたが九四年（約八六万人）をピークに組織人員は伸び悩み（合理化で減り続け・編集部）、六〇万人を切る状況に至っています」と。実態はもっと深刻、五七万強だ。収入源は組合費だから財政はたいへん。というわけで『既存の活動のスクラップ・アンド・ビルド』を含めた施策を論じ、単年度における収支均衡（プライマリーバランス）の実現を図ります」だって。

C 政府税調と同じことを云ってるね。プライマリーバランスなんて。

### 原発推進

B 電機の考えは政府・財界と同じ。それをもっとも露骨に示すのが第三次エネルギー政策。原発推進テンコ盛り。具体的にはこうだ。

① 原発は不可欠なエネルギー源。核燃料サイクル確立、「進行波炉」の研究・開発・実用化を進める。

② 安全性の強化・確認と、周辺自治体を含めた地元住民の合意と国民の理解を得ることを、国の責任で行うことを前提に、停止中の原発の再稼働を求める。

③ 国に原子力技術と人材の安定的確保を引き続き責任をもちとりにくんでいくよう働きかける。

A そこまで言うのかって感じだな。

B 原発は一基四〇〇〇億円、二基が単位で八〇〇〇億円もの金を食う。関連独占企業には、儲けの打ち出の小槌。

『月刊労働組合』（八月号）は電機連合の原発政策について、「火力や水力、原子力などの多様な電源の組み合わせにより、その特性を活かす『電源ベストミックス』を考え方の柱とする『第三次エネルギー政策』を確認した」と伝える。

A 『月刊労働組合』は原発賛成なのか、そうとれるね。

C 『月刊労働組合』の書き手は厚労省の外郭団体、連合の幹部たち。経営維持のため、かつての労戦問題の時と同じように、「体制側」にすり寄ってる。さあっと目を通しているだけだが、そんな感じだな。

### 「統一闘争」?

B 電機が一番頭を悩ませているのが「産別統一闘争強化」。「強化」といっても矛盾をおさえる手法でしかないんだけどね。冒頭にAさんが述べたが、根本は国内生産の大幅減少のもと産業の業績に大きなばらつきがあるばかりか、ばらつきが拡大する傾向にあることだ。そこでの電機連合ダラ幹の問題意識は①大手の要求に追従する方式は、個別労使交渉では通用しなくなった、②その中で電機連合の求心力とはなにか、③ミニマム基準にとりくんでいるが、それだけで求心力をたもてるか。

これが産別統一闘争強化プロジェクト報告の背景だ。方針は新たな目標水準（最高水準、三十歳相当）に三五万円を掲げた。この下に、めざすべき水準IV、到達水準（二七万円）、めざすべき水準II、ミニマム基準という五つの「水準」を設定することで、

大手、中小統一闘争を強化出来ないかとの机上の案である。実現には闘争力が問われる。  
(つづく)

## 大野平和運動センターで大活躍

―元大分闘争団・赤峰さん家への旅(上)―

**鮎釣り** 蓑輪さんと北海道の元闘争団を訪ねる旅から約一ヶ月、新潟の小林義昭さんとの数年、すっかり恒例となった元大分闘争団の赤峰正俊氏との交流に豊後大野市に向かった。旅程は八月五日から四日間。北海道への旅の目的は音威子府、名寄、旭川の仲間たちが、闘争終了後どう事業を拡大しているか、二三年もの辛苦の闘いをどう生かしていらっしやるかを見聞すること。彼らは蓑輪さんの報告(本誌一一四九、五〇号)にあるように、私たちの期待を充分すぎるほどに満たしてくれた。

赤峰さんへの旅の目的は鮎をかけること、「友釣り」です。赤峰さんと知り合ったのは一九八九年前後。灰原茂雄さんが「滝野さん、大分に赤峰さんという素晴らしい青年がいる。彼は若い―当時三五歳前後かな―けど、しつかり自分の考えを持っていらしやる」と手紙で知らせてくれたのがはじまりだ。

原稿依頼の手紙を書き、『通信』に掲載してからだから、赤峰さんとの付き合いは一五年という所だろうか。赤峰さんの書斎には「夜明け前をともにたたかう仲間たちへ!一九九八・五・二二」と、あの独特な書体で書かれた灰原さんの色紙が掲げられてありました。

**赤峰さん** 赤峰さんは一メートル八〇センチ、体重百キロの大男。北海道の羆(ひぐま)とはとても勝負にならないが、本州の月の輪熊とは十分に相撲がとれる偉丈夫。眼は愛らしく、人柄は魅力的かつ優しく、全力で向き合う。一度会えば惚れ込まれずにはおかない。だから彼は作家、芸術家、映画監督など著名人を仲間にする、交際範囲は広い。

宿はつねに赤峰宅。木の香りいっぱいバンガロー風の家宅である。幼かった二人の息子さんが、「こんにちは」とむかえてくれる。立派に成人し今では社会人。ぼくには孫に会う、そんな気分である。

赤峰さん家(ち)はいつも人であふれてる。鮎釣り仲間の恩賀さん、春藤さん、郵便屋が本職だが川漁師としか見えない麻生さん、社会通信読者会でお世話になり続けている元郵便局員でカボス農家の佐藤さんや、そして深田さん。赤峰さんは今大野地区平和運動センターの事務局長。「センター」は書記局、百人の会議ができようかという会議室、二階には二十人が雑魚寝できる「寝室」がある。

**釣れた 釣れた** 八月五日午後、私として小林さんは別々の便で、赤峰さんの迎えを受けセンターへ。赤峰さんいわく、「妻はおやじの看護で病院泊、寝所はここ」。初日、センター役員会傍聴。若者が熱心に議論しておりました。八時終了、滝野・小林・赤峰の宴会、料理人は赤峰さん。食材は五〇センチを超えようかという天然ウナギ四〜五匹、七輪に炭火で蒲焼きと白焼き。なんとぜいたくなことか。



翌日はセンターで社会通信交流会、十一人の先輩読者大集合。にぎやかでした。

食材は今日釣り上げた天然アユ、参加者全員が家庭料理を持ち寄り、都市では絶対に取りつけない珍品ばかり。うまかった！「おまけ」がありました。昨年は新潟二人（小林さん、佐藤さん）、山形一人と私の四人が赤峰宅に押しかけました。

山形のお人、だれとみなさんは想像されますか。お相撲さんを思わせる大きな人、「元新宿保線区の山田則男さん？」、正解です。山田さん、「ことしも参加してる、忘れないで」というかのように、熊の肉がとつじよ届いたのです。料理人どうすると、私は興味深々。気温は三五度、冷凍熊肉は自然解凍、包丁でゴシゴシ、そして炭火焼き。「食べたい人」、全員挙手です。あつという間にニキロの塊は胃袋へ。いのしし、鹿はだれもが経験、熊食べたことありますか。他にだれが釣ったかしらねども、鱒（あじ）や鯖（さば）。どれもこれももうまかった。センター書記局での酒盛りです。

「鮎つれたか」ですつて。釣れた、釣れた、三年ぶりの大漁です。過去二年はゼロ、というのは腕がまずいのは当然のこととして、大水、渇水で釣りにならなかったんです。鮎の友釣り、自然状態に振り回されてしまうのです。ですから一匹釣れても大漁なのに、三日で二〇センチこえるの鮎ちゃんが二〇匹超も。

小林さんの執念たるやものすごい。「友釣りは残酷（ざんぎやく）」。鮎ちゃん可哀相」といいながら、一日中川原を駆けめぐり、疲れることを知りません。なんと一五匹、私といえばたったの四匹。赤峰さん他地元の釣りキチは「釣りの楽しみなくなつた。初心者に楽しんでもらいたくありません。」

釣りキチいわく、「川は荒れ、放流鮎の子孫は『縄張り』本能忘れ、群れるばかりで追わなくなつた、友釣りは終わり」と。（滝野 忠、つづく）

## マルクス、エンゲルスの「告白」

―エンゲルス没一〇八年から―

**出会い** 落語家・古今亭志ん生が寄席でよくまくらに使った小咄（こばなし）に、「ある蟹が仲間の蟹を見て、『あの野郎酔ってんじやねえのかい。まつつぐなんか歩きやがってよ』があつたとか。連日の猛暑、友人いわく「蟹が泡吹いてまつつぐ歩いてた」ひよつとすると本当かもなんて、冗談に乗せられそうな毎日です。

暑さを和（やわら）げるテーマはないものかと、蟹以上に泡吹いているわが頭を搾り搾って考えついたのが、科学的社会主義の巨人マルクスとエンゲルスの友情物語です。マルクスは一八一八年、エンゲルスは一八二〇年生まれです。

マルクスは弁護士の子、妻は貴族の娘。エンゲルスは大紡績業者の息子、妻は貧しい労働者の娘で籍を入れておりません。氏も育ちも違う二人の若者が最初に出会ったのは一八四二年十一月、エンゲルスが「ライン新聞」編集部を訪ねた時でした。二回目は一八四四年八月です。二つの出会いを契機にマルクスとエンゲルスの約四〇年の友情、その証左が往復書簡（マルクスは一八八三年没）です。

**往復書簡** この数年、『マル・エン全集』（全三九巻）、とりわけ二人の書簡（二七〜三九巻）をくり返し読みました。二人の巨人の知的格闘、そして現代にいたる知の歴

史がすべて包含されていると感じたからです。これをどう表現したらいいかと悩み、向坂逸郎著『マルクス伝』（新潮社、一九六二年刊、マルクス・エンゲルス選集第一三巻、三四七頁）に相談、こう書かれてありました。

「最後にとくに述べたいことは、エンゲルスが、マルクスその他たくさんの友人、後輩に与えた書簡の価値である。マルクスとエンゲルスの往復書簡については、いまさらいうほどのこともないが、その他については、それはマルクシズムの理論の解説であると同時に、あらゆる知識部門への、その適用の指針をなすものである。労働運動の実践に対する最良の参考文献であることはいうまでもない。さらに、マルクスやエンゲルスの人となりを知る根本的な手がかりであり、またプロレタリア運動の歴史的文献でもある。

ロシアのナロードニキの理論家ダニエルソンの質問に応じたエンゲルスの返書のごとき、日本資本主義論の最もよき参考文献である。」

向坂先生しか書けない文章です。先生は世界に先駆け『マル・エン全集』を刊行されているのです。

**共産党宣言** マルクスとエンゲルスが親和力、協力をともに友情を固め合ったのが、不滅の名著『共産党宣言』です。エンゲルスは一八四七年一月、マルクスへの手紙に、こう記しています。

「信条のことをもう少し考えてくれたまえ。僕は、問答形式をやめて、それを共産党宣言という題にするのがいちばんいいと思う。そのなかでは多少とも歴史を述べなければならぬのだから、これまでの形式ではまったく不適當だ。僕は自分が書いたこちらのものを持って行く。それは平易に述べてはあるが、まずい編集で、大急ぎで書いたものだ。僕は、共産主義とはなにか？から始め、それからすぐに、プロレタリアート―発生史、以前の労働者との相違、プロレタリアートとブルジョアジーとの対立の発展、恐慌、結論、となる。その間にさまざまな付随的なことを述べ、最後に、公開するべきかぎりでの共産主義者の党の政策となる。こちらのものはまだ全部は承認を求めて提出してはないが、僕は、わずかばかりのごく些細な点を除いては、少なくともわれわれの見解に反するような点はそのなかには一つもないように、仕上げようと思っている。」

**搾取** マルクスは二九歳、エンゲルスは二七歳でした。この時から、二人の巨人は科学的社会主義の完成『資本論』へ、二人の分業と協業が始まるのです。

七月末、あるセミナーを聴講。講師は政府のおかかえ学者稲上毅（元東大教授、元厚労省外郭団体・JILPT理事長）氏。彼は「新たな社会モデル」の理念は産業民主主義と強調されておりました。稲上氏いわく、「産業民主主義は勤勉と節約（反浪費）、反投機、公共の福祉に貢献する」、「産業資本主義と対立するのは『証券型金融資本主義』と『（人的・環境的）掠奪資本主義』とドラ声を張り上げていらつしゃいました。彼はアナログ時代の学者さん、「僕はデジタル時代の人間ではない」というかのように、パワーポイントを操作したのは、労使関係論を専攻し、ユニオン講師として全国を駆けまわる稲上氏の弟子、JILPT研究員の呉学殊さんでした。

稲上さん流の価値観からすれば、「人に優しい資本主義つくりましょう」ということになるでしょう。この考えは、資本主義観の二つの流れの一つでしかありません。もう一つははやりの「新自由主義」ですけれど。労働者階級の最大問題は搾取、このことが忘れられてはなりません。

エンゲルスの命日は一九九五年八月五日、マルクスは一八八三年三月一四日。マルクス六五歳、エンゲルス七五歳でした。

（伊勢 太郎、つづく）

## 「集団的自衛権」の解禁は、戦争への道

— 『集団的自衛権とは何か』(豊下楢彦著、岩波新書)を読む —

安倍政権は、反対する政治勢力が壊滅する中で、いよいよ「戦争のできる国」へと暴走を始めた。これまでの自民党政府が禁じてきた「自衛隊による集団的自衛権の行使」を、憲法改「正」を待たずに、解釈の変更で解禁しようとしている。

まずは内閣法制局長官に行使容認派を起用、私的諮問機関「安保法制懇」(メンバーには葛西JR東海会長も)の再開など急ピッチだ。アメリカの手下になって、再び、世界に銃口を向ける「美しい国」(安倍の国家像)にさせてはならない。『集団的自衛権とは何か』(豊下楢彦著、二〇〇七年発行、岩波新書)に学んだことを記す。

### 予備知識

この本は第一次安倍内閣の頃に書かれているが、今まさに読んでおきたい本の一つだ。まず一通りの予備知識を整理しておく。

▼国連憲章の武力行使禁止原則(二条四項)の例外として、武力行使が認められる三つの場合、①(集団安全保障) 安保理の決定に基づく「軍事的措置」(四二条) — 仮想敵を想定しない。②(個別的自衛権) 自らの国が攻撃された場合に自衛する権利、③(集団的自衛権) 自国と密接な関係にある外国に対する武力攻撃を、自国が直接攻撃をされていないにもかかわらず、実力をもって阻止すること(通説) — 仮想敵を設定、②と③は、安保理が必要な措置をとるまでの間に認められる(五一一条)

▼集団的自衛権は国連加盟国である日本もその権利を保有しているが、国際紛争を解決する手段としての武力行使の放棄と、国の交戦権の否認を規定した憲法九条によつてその行使は認められないというのが、政府の一貫した解釈である。(「はじめに」より)

### 俗論

この政府解釈を変えようとして安倍は「権利があつても行使できないのはおかしい」などと「俗論」を展開する。

これに対し内閣法制局長官は「国家が国際法上ある権利を有しているとしても、憲法その他の国内法によりその権利の行使を制限することはあり得ることであつて、法律上矛盾の問題は生じない。

集団的自衛権は、わが国に対する武力攻撃が発生していかないにもかかわらず外国のために実力を行使するものであり、個別的自衛権行使の第一要件である、わが国に対する武力攻撃が発生したことを満たしていない。

従来、集団的自衛権は自衛のための必要最小限度の範囲を超えないという説明は、この第一要件を満たしていないという趣旨であり、数量的概念ではない。」と答弁(二〇〇四年一月二六日衆院予算委)し、安倍の主張を真正面から否定している。(「序章」より)

## 「日米一体化」をせまる米国

戦後の日米関係において「集団的自衛権」はどのように位置づけられてきたか。

一九五五年自民党結党当時の改憲の論理は、「押しつけ憲法論」に立ちながら安保条約も押しつけられたという認識であり、「自主防衛」⇨米軍基地撤去、「自主外交」⇨対米一辺倒からの脱却、ソ連中国との国交正常化が戦後体制からの離脱を意味していた。「日米同盟強化」という今日の安倍の改憲の論理とは全く異なるのである。

旧安保条約改定の要請（一九五五年）を機に集団的自衛権が米国の要求になるが、米国はそれよりも日本の米軍基地を失うこと、中立主義に向かう日本の動向を恐れ、集団的自衛権問題は棚上げして一九六〇年の安保改定が行われた。

しかしこの時堅持された「極東条項」は、日本が米国の戦争に巻き込まれるのではないかという議論を国会で巻き起こし、沖縄返還に向けた一九六九年佐藤・ニクソン声明「韓国・台湾条項」でも集団的自衛権の議論が行われ、冒頭に紹介した政府見解が作られていくのである。

一九八三年の中曽根・レーガン声明で日米同盟が一気に進展するが、それでも想定される「極東有事」を「個別的自衛権の範囲内」と答弁していた。

冷戦の終焉を経て一九九〇年代に入ると事態は変わる。湾岸戦争は、「極東有事」を対象としてきた日本の議論の前提を揺り動かし、「国際貢献」の名による自衛隊の海外派遣を求めることになった。

さらに九六年には橋本・クリントン「日米安保共同宣言」が出され（安保再定義）、安保条約の範囲が極東からアジア太平洋地域（周辺事態）に一举に拡大されたが、米軍への支援は「武力行使と一体化しない」ことが前提とされた。

しかし米国は、「周辺事態」において日本が「ノー」を言わずに対米支援を行なうだけでなく、集団的自衛権に踏み込んで武力行使を伴った軍事的支援を行うことを求めている。

二〇〇一年の同時多発テロ事件は日米関係にも影響し、小泉政権は極東でもアジア太平洋でもないインド洋に自衛艦を派遣、さらにブッシュが二〇〇三年イラク戦争を始めるや、自衛隊を「非戦闘地域」サマワに派遣した。

しかし「復興支援」が目的であり、集団的自衛権には踏み込めていない。だからこそ、解釈変更が要請されることになる。イラク戦争は世界的な米軍再編と関係しており、日米関係では「国家戦略の一体化」が目標とされた。（第二・三章）より）

### 自衛権概念を大きく変更

米国は二〇〇三年、安保理決議に基づかず、集団的自衛権の要件である「武力攻撃の発生」もないまま、「予防」としてイラク戦争を始めた。これは「敵の能力とたくらみという切迫せる脅威から防衛するための先制攻撃」（ブッシュ・ドクトリン）という新たな自衛権概念がベースになっているが、「先制攻撃」を拡散させる危険性が大きい。（第一章）より）

集団的自衛権は「共通敵」を前提とするが、米国は「友・敵」関係の設定において、

冷戦時代も含め、当面の国益判断から「敵の敵は友」という短絡的戦略戦術を採用して同盟諸国を振り回し、新たな脅威も生み出してきた。

レーガンとブッシュ・ジュニア政権による、イランに対抗してのイラク支援は、イラクのクウェート侵攻まで続けられた。レーガンとCIAはまた、アフガニスタンに侵攻したソ連に対決するため、イスラムゲリラに対空ミサイルなどの軍事援助を与え、とともに、オサマビンラディンらを使いムスリム急進派をパキスタンに結集させた。

反米テロという新たな「脅威」は、ある「脅威」に対抗するために米国が利用し育てたものである。テロリストと核兵器が結合する危険がある。パキスタンに対しては、米政権の態度は時々都合で変わり日本もこれに振り回されてきた。集団的自衛権の行使が容認されれば、米国が次々と設定する「敵」との戦争に日本も参加を強いられることになる。

安倍は「米国と対等、肩を並べる関係になる」という。しかしこれは幻想にすぎず、米国から集団的自衛権の行使を求められる際に、日本が主体性を発揮して「ノー」と言えば、米国にとっては「日本の裏切り」にしかならない。

また安倍は、「軍事同盟は血の同盟なのに日本は血を流す体制になっていない」と言う。しかし日本は、米軍の世界展開における太平洋を超えた最重要前進拠点になっているが、米軍には冷戦時代のような日本防衛という役割はなくなった。むしろ米軍基地を守っているのは自衛隊であり、日本が在日米軍のために「血を流す」構造、「対等」になっている。（「第四・五章」より）

### 本当の「戦後体制からの脱却」

自民党新憲法草案で創られる「自衛軍」は、米国に協調して集団的自衛権の行使をする対米貢献となってしまう可能性が高い。

こうして安保条約のもとで、日本の「自衛軍」が「血を流す貢献」を行なうという、現行憲法では許されない事態が展開されることになる。「自主憲法」も結局のところは、今日の米国の国益を背景とした新たな「押しつけ憲法」でしかない。

一九四六年マッカーサーの指示によりまとめられた現行憲法は、天皇制維持（一条）と日本の非武装（九条）がセットであり、また日本の非武装は沖繩の米軍支配と表裏の関係にあった。

憲法九条と安保条約を軸とする「戦後体制」は、在日米軍基地の七五%を押しつけられた沖繩の犠牲の上に成り立ってきたのであり、真の意味での「戦後体制からの脱却」とは、日米二国関係を呪縛されて国際問題に対処し沖繩を犠牲にしてきた「体制からの脱却」でなければならぬ。（第六章より）

安倍の歴史認識に対しては中国韓国だけでなく、米国の保守派でさえも危惧を抱いている。こうした中で集団的自衛権の解釈変更が進められ、憲法改正が具体的な日程に載せられようとしているのだから、周辺諸国が重大な警戒を抱くのは当然だろう。

日本がなすべきことは、「戦後体制からの脱却」以前に、「戦前戦時体制」を支えた価値観からの脱却ではないか。日本のアジアからの孤立は、米国との二国間関係へのめり込みであり、「戦後体制」そのものなのである。（「おわりに」より）（森 勉）

## ◇ 読者からのおたより ◇

課題 第二二回「原爆の絵展」(八月一〜四日)、やっと終わりました。労働運動と市民運動の目的意識的な統一が課題です。(千葉・鳩川 静)

編集部より 高杉晋作の辞世の句に「おもしろくない世をおもしろく…なんてのがありました。寂しい、悲しい、くたびれる労働組合大会を取材、次への発展の芽探るため。

お願い 誌代一年分。お願いです。第一一四七・八を九月一日号と二一緒に送付してください。誌代残をその代金に。(横浜・T)

編集部より 活躍に敬意。暑くつて、くたびれます。ご自愛を。バックナンバー誌代は不要です。暑中お見舞い 暑中お見舞い申し上げます。一年分送金します。(鹿児島・Y)

編集部より 暑い！でも電力不足↓原発再稼働の大宣伝がなくなり、涼しさも。雨雨雨 春先の天候不順で農作業も二週間ほど遅れました。六〜七月頃までは空梅雨で終わるかなといった空模様でした。しかし、その後は、雨、雨、雨。幸い災害までには至っていないものの、庄内柿(山形の特産)は九〇%以上落下してしまいました。(山形・T)

編集部より 北海道稚内からも同じ連絡。元稚内闘争団の仲間たち月五千円で季節の薫りを送って下さる。アスパラ一ヶ月遅れ、メロンも。農家たいへん。T P Pでさらに。

申し訳なし 振り込み票が家になかったため、送金済みと思いついておりました。ご意見を。編集部より 私なんか、しょっちゅうです。ありがとうございます。(鹿児島・N)

参議院選 結果は予想していたけれど大変な情況。当地での社民党の得票率は二一・三%。今以上に仲間たちと話し合い、学習をすすめたためです。(北海道占冠村村議 五十嵐正雄)

編集部より さすがですね。二一・三%の「秘密」報告していただければ嬉しい。

ぜひ来て 前号の通信で名寄〜音威子府方面の記事拝見しました。来年はこちらの方へ足を向けたいとのことで楽しみにお待ちしています。今年になって「国鉄闘争の総括」に関わる本が出始めました。それはたいへん結構なことです。労働運動総体から見た国鉄闘争の意義や教訓は後生に残すに値するのでしょうか、そこはしっかりやらなければならないと思います。個人として一番残念なのは闘争の幕の引き方と、幕を引いた後の出演者が「何で？」と思うくらいにバラバラになつてしまっていることでしょう。(北海道・S)

編集部より おっしゃることよくわかります。本当のご自分の自由時間がたつぷりできたのですから、急がず焦らずに、それぞれが納得する生き方を歩む、今後が楽しみです。来年、稚内を訪ねることはたしか。弥次喜多の相棒が稚内望んでますから。あとはその日まかせ。連絡します。

「オキナワだより」 沖繩を離れたのが六月一三日でしたから、早いもので二ヶ月になります。なかなかヤマトモードに戻れない自分を歯がゆく思っています。今回の「オキナワだより」を最終号にして、気持ちの区切りをつけたいと思います。これからも沖繩とはつながり続けていきますので、また別の形で発信できればと思います。石垣に暮らす歌人の俵万智さんが、サザン復活に寄せたメッセージが目にとまりました(8/7朝日)。灼熱の太陽のなか、普天間ゲートを守っている皆さんには気が引けるばかりですが、明日は五年ぶりのサザンに会いに横浜日産スタジアムに出かけます。(毛利 孝雄)

編集部より 私は大分へ鮎釣り。鮎は案内人がいないと釣れません。「やんばるの森」と同じ。だから面白い。時期みて使わせていただきました。

送金しました こんばんは。増田です。社会通信に「ますだみやこニュース」のサワリを載せていただき、たいへん、ありがとうございます。なぜか、さつき、突然、カンパもいただいていましたのに、お礼も言わずにいたこと&会費を払っていないことを思い出し(笑)、先程、ゆうちょダイレクトで一年分振り込みました。『社会通信』に入っていた七月二五日付けの「ご請求とお願い」の意味が、よく分かりましたので：ホント、私って算数が苦手(笑)なので：一年分として一万円振り込みました。残額はカンパということでは：(増田 都子)

編集部より お帰りになりしだい久しぶりに楽しくお会いしたい。

J R 北海道の危険性 「JR北海道」(事故多発・重大事故の危険性大)に関する「北海道新聞」のコピーに目を通して下さり、ありがとうございます。是非ともこの機会に、感想・意見等を「投稿」していただければ嬉しいですね。どうか宜しくお願いいいたします。(札幌・福松)

編集部より A3二二枚の記事と、元国労員の熱意あふれる解説。次号の「通信」に掲載します。